COPD 増悪に対する外来での静注抗菌薬療法

在宅管理で再入院や合併症のリスクを低減できる可能性

Int J Clin Pract. 2017

慢性閉塞性肺疾患（COPD）の急性増悪は、home hospitalisation units（HHU）で外来静注抗菌薬療法（OPAT）を実施することにより効果的かつ安全に管理できるという研究結果が、「International Journal of Clinical Practice」9 月 26 日オンライン版に掲載された。

COPD 患者は平均して年間 1～4 回の急性増悪をきたしており、患者と医療制度の双方に負担となっている。一方、HHU は在宅患者を病院が管理して治療や看護を行う組織モデルであり、その管理下での OPAT は COPD の急性増悪に対する代替の治療手段となる可能性がある。しかし、その有効性や安全性を検討した研究はこれまでほとんど行われていなかった。

今回、グランカナリア・ドクターネグリン大学病院（スペイン）の Miguel A. Ponce González 氏らは同国の OPAT 登録データベースを用い、COPD の急性増悪に対して HHU 管理下で OPAT を実施した場合の有効性と安全性を評価した。

27 カ所の病院において COPD 患者（GOLD III-IV）361 人（平均年齢 75 歳、男性 79%）に対し、急性増悪時の OPAT が 562 回実施されていた。分離された起因菌としては緑膿菌（37.7%）が最も多く、処方された抗菌薬はピペラシリン・タゾバクタム合剤（20.5%）が最も多かった。93.4%の患者では改善または回復が認められ、OPAT が有効であったことが明らかになった。さらに 89.3%の患者では薬剤有害事象や感染症、カテーテル合併症をきたさず、OPAT を安全に実施できたことも分かった。また、80 歳超の患者でも再入院リスクは上昇しなかったほか、OPAT を患者自身が実施した場合と医療者が実施した場合とで、有効性や安全性には差は認められなかった。

著者らは「米国では年間 25 万人以上の患者に OPAT が実施されているにもかかわらず、呼吸器感染症、特に COPD の急性増悪に対する OPAT の有効性や安全性を検討した研究は少ない」と説明。「今回、適切に患者を選択すれば、COPD の急性増悪に対して HHU 管理下で OPAT を有効かつ安全に実施できることが分かった。併存症の多い重症 COPD 患者では急性増悪による死亡や再入院のリスクが高いことを考えれば、今回の結果は優れたものであり、さらに在宅での治療は合併症を減らすのにも役立っていると考えられる」と結論づけ、HHU は COPD の急性増悪において入院治療の代替、あるいは入院期間の短縮に有用であり、再入院や合併症リスクを上昇させることもないとしている。

（1）メディカルカスタムコンテンツ は、AJ Advisers LLC が制作、株式会社プロウェーブが編集（編集協力 AJ Advisers LLC）した記事です。情報の正確性については万全を期しておりますが、各制作・編集社は、利用者が本記事の情報を用いて行う一切の行為について何ら責任を負うものではありません。
（2）本記事の内容及びメディカルカスタムコンテンツのロゴの無断転載・配布も禁じます。
（3）掲載されている薬剤の使用にあたっては添付文書をご参照ください。

提供：光製薬株式会社　制作：エイ・ジェイ・アドバイザーズ LLC　編集・発行：株式会社プロウェーブ　KSB0043　1712